

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006 ～ 2009
 課題番号：18300243
 研究課題名（和文） 大正・昭和期の服飾に関する記述データの保存と生活文化史的解析
 —新聞・雑誌・文芸—
 研究課題名（英文） Preservation of descriptive data in connection with costumes dating
 from the Taisho and Showa eras and historical analysis based on the culture of everyday
 life as seen in newspapers, magazines and literature
 研究代表者
 安蔵 裕子（ANZO YUKO）
 昭和女子大学・人間文化学部・教授
 研究者番号：80102648

研究成果の概要（和文）：本学の服飾文化研究室には、明治・大正・昭和期（昭和37年頃まで）の主に新聞・雑誌から抽出した服飾に関わる記事が手書き原稿で約3万枚現存する。それらの教育・研究への有効活用を実現する目的で、電子化による保存とデータベース検索システムの構築を推進した。今回は、大正・昭和期（昭和27年頃まで）の記述・画像データをサーバ機器のファイルシステム上に格納し、キーワード検索機能の運用体制を整備した。同時に服飾を視点とした生活文化史的な解析方法を検討した。

研究成果の概要（英文）：The Costume Culture Research Seminar at this university possesses around 30,000 hand-written documents constituting excerpts from articles concerning costume that appeared in newspapers and magazine during the Meiji, Taisho and Showa eras (ca. 1870-1962). In order to make these materials available for effective research purposes, we are working on digitalizing the texts and pictures in these documents and creating a database search system. Our study on this occasion has been concerned with methods of research into lifestyle culture using this textual data from the standpoint of the culture of costume with reference specifically to the period between the Taisho and early Showa eras (ca. 1912-52).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：(1) 近代服飾史資料 (2) 新聞・雑誌・文芸 (3) 大正・昭和期 (4) データベース
 (5) 検索システム

1. 研究開始当初の背景

昭和女子大学では、学園創立者の教育理念に基づく一貫した指導により、家政学の分野では昭和29年頃から、食物学及び被服学の各研究室において資料調査が実施された。当時の被服学研究室では、教員の指導のもと学生の手によって主に新聞・雑誌と一部文芸作品を対象に、衣生活又は服飾文化にまつわる記述が筆写された。この近代服飾史記述資料の収集は、図版や写真のトレース、複写、その他古写真などを含め、昭和50年頃まで行われた。

それを基に被服学担当教員らは、明治・大正期の資料を年代・項目別に分類整理し、成果は本学紀要などで順次発表された。さらに集大成として昭和46年に昭和女子大学近代文化研究所より『近代日本服装史』(明治・大正編)が刊行された。本書は、他に類を見ない近代服飾史上の種々の諸相が収録され、多くの研究者の手引きとなり、引用文献としても盛んに活用され今日に至る。

その後、続編としての昭和時代編を刊行すべく記述資料の分類整理が再開された。しかし、この膨大な資料を被服学常勤教員のみで読み取る作業は困難を極め、また協力者への謝礼の確保も叶わない状況であった。時を経て今日もお写真、図版を含めた原稿用紙約3万余枚が現存するものの、今後、管理者不在が想定されるまでもなく、研究資料としての価値を発揮させる機会は今失われる一途であった。

以上の経緯を踏まえ、先輩諸氏の調査研究作業を受け継ぎ、現存する手書き原稿全ての有効な活用方法を検討するに至った。

2. 研究の目的

上記の手書き原稿は、時代の世相を反映した新聞・雑誌・文芸から抽出された貴重な記述であり、服飾文化史研究においても資料的価値が高い。本研究では、それらを学術資料として教育・研究へ有効に活用させることを目的とし、データの適切な保存とその活用機能を構築することが第一の成果目標である。将来的には資料集成の刊行も視野に入れて臨むものである。

(1)生活文化史としての記録作成を講じる

服飾そのものの実態は伝世困難であり、衣生活周辺の記述についても、教育研究分野において積極的な記録措置が講じられなければ失われる。和装・洋装の物質的な変遷のみならず、流行や社会的批評、経済・産業、倫理観の変容、教育史や女性史など、連関する研究の方向は広範であり、服飾を包含する過

去の生活文化が如何に存在したかについての記録作成は急務である。

(2)服飾文化史上の具体性をデータ化する

大正・昭和といえども、衣服はもちろんのこと、その着用を知る手がかりとしての画像や、実相を語る記述は容易に得られるものではない。しかし本研究課題で取り上げる紙面には、すでに用いられなくなった和服生地の種類、服飾材料の名称、衣料品の特産地、季節感や用途、価格、新型とされた衣服形態、流行色名、身体の部位に関する美感覚の変化、倫理観や風評など、生活の諸場面が具体的に記載されている。これらを電子データ化し学術資料として保存する。

(3)データベース検索機能を構築する

上記を学術資料データとして教育・研究に活用できるよう、データベース検索機能を構築する。幅広い資料収集の合理化を図ることによって、将来的には服飾の視点からの近代生活文化の推移をまとめた資料集成等の制作に着手したい。

3. 研究の方法

本課題の成果目標に向けて以下の手順で進めた。

(1)上記資料群から大正・昭和期の記述・画像の電子化作業を推進

- ①通し番号を付したファイルの作成によって資料の全貌を明確化
- ②レイアウトと使用文字等の様式統一、旧漢字、誤字・脱字等の表記方法に関するデータ入力時の凡例を作成
- ③凡例に基づき、年間枚数原稿用紙3,000～4,000枚検討での入力と校正等を進捗管理

【記述データ入力の凡例】

○タイトル→フォント18・太字
例：68 昭和1年～5年
○日付・ページ→太字
例：昭和2年 4月 279頁
○分類→フォント12・太字
例；羽織
昭和2年 10月 177頁
今秋の新流行
一色の無地、小紋、ぼかし、いづれもきまりきったという様な感じのために、
○タイトルや副題は段落を下げる
例：昭和2年 4月 279頁
春を彩る流行のさまざま
訪問服
花見頃の衣装一揃に就いて今春流行の特長を調べますと先づ最初に訪問服です
○欠字→□
○解読不可能→■
正しい文字はわからないが、予想できる文字はルビで「？」をつける。
例：昨日七日大原前侍促殿品川宿御着途中行列侘練太郎白地菊御紋

○文字の間違ひ等→書き写された通りに打ち込み、ルビで「～か？」をつける。

此か？

例：若し政府 比 事件を全く廃する時

○文章と共に挿絵が入っている場合→改行して（挿絵あり）と入れる

例：横浜開港場■より「居留地廻り役といふものを設けしが明治四年八月九日「居留地取締役」と改め服装を改正し頭に載ける蕨山及び腕部に「ポリス」との洋字を記すこととなれり。

（挿絵あり）

○別ページ（資料篇など）に挿絵が入っている場合→日付の後に（挿絵あり）

例：昭和3年 2月 口絵（挿絵あり）

（a-1）別紙参照 p 1）

流行は時代精神の反映と謂われますが今春の「新日本模様」その代表的なものであります。…

(2) データベースシステムの構築

①研究室にサーバ機器を設置し、運用のための環境を整備

②電子化したデータの格納

(3) 記述資料及びデータ検索を併用した調査研究

①各連携研究者の専門に即した検索キーワードを想定した調査研究

②データベース機能を用いた生活文化史研究へのアプローチ方法の検討

3. 研究成果

(1) 記述・画像・古写真の電子データ化

研究室に保管されてきた全ての手書き原稿用紙は新たなファイル204冊に整理し、大正・昭和期に関する原稿用紙約16,700枚分の記述（画像を含む）と別途保管の古写真を電子データ化した。

(2) データベースシステムの構築及び運用のための環境整備

①服飾文化研究室にサーバ機器を設置し、研究室内のLANに接続したPC端末からサーバ機器へアクセスし、WEBブラウザ上から検索できるシステムを構築した。

②データシステムは以下の通りである。主システムは、NASサーバ機器（OSはWindows Storage Server）と全文検索エンジンNamazuで構成

- ・NASサーバ機器のファイルシステム上に研究資料の電子データを格納し、データベースを構築
- ・サーバ機器には、全文検索エンジンNamazuを実装、キーワードによる検索に対応

【近代服飾記述DB検索手順 一概要一】

デスクトップ上「近代服飾記述全文検索」アイコンから検索（キーワードの入力）画面へ

⇒ 検索キーワードを入力し検索ボタンで

該当する文書が一覧表示される

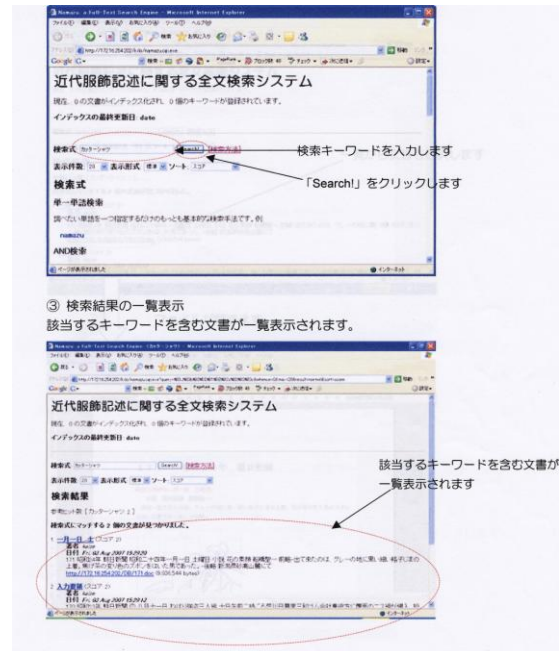
⇒ 該当文書を選択し、ファイルを開く

⇒ ファイル内検索→求めるキーワードの記載箇所を検索

⇒ 検索キーワードを入力し検索

⇒ ファイル文中のキーワード記載箇所が反転表示される

【近代服飾記述DB検索操作 一検索画面一】



(3) 記述資料及びデータ検索を併用して行った調査から得た事項等

①本記述資料の特性とデータ検索の効率

- ・筆写された内容は多種の発行物からの抽出であり、挿し絵や画像の写しも備わっていることは、服飾のデータとして資料的価値を高めている。
- ・欠点としては、誤字・脱字・旧字の扱い方の不統一等が挙げられるが、論考の際は、如何なる方法によっても原典資料の確認は必須である。
- ・テーマに沿った単一または複数のキーワード検索によって、記載された記事が検出され、いつ・どこに・どのような文脈の中で述べられているかが瞬時にPC上に表示される。このことは調査研究を効率的に推進する最大の利点である。

②複数のキーワード検索から得られる有機的解析の検討

連携研究者とともに記述資料データを用い、服飾関連用語の整理、項目別検索キーワードの抽出を試み、服飾文化研究への活用と生活文化史的アプローチ方法を検

討した。例えば以下のようにキーワードそれぞれから大正・昭和期の服飾文化変容の様相を観察した。

なお、電子化を本研究課題の第一義の目標としたことから、原本紙面からの抽出が中心となり、一部検索機能を併用しての調査となった。

○皮革材料の分野では「靴」を調査対象とし、大正12年から昭和9年の新聞（東京朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、信濃毎日新聞）、雑誌（婦人画報、婦人倶楽部、婦女界、被服）に加え、近代文学作品を用いて検索した。

その結果、昭和3年頃から靴に関する記事が多数検索され、デザイン、履き方、衛生、歩き方、選び方にまでおよぶ。昭和6年には革靴生産量も増えているが、洋装への批判が観察される中、慣れない踵の高い靴がいかにも日本人の足に合わないもので、歩く姿が最も醜い光景や、靴は訓練しないと履けないもの、日本女性にとって最大の難関は靴、とある。一方で、昭和7年には履き捨てる靴の数が年間6,700万足以上に達するほど普及し、婦人画報では「現代婦人靴の常識」として革の種類、手入れと保存についての特集が行なわれた。しかし高価であったために一足の靴を修理しながら大切に履いていたこと、足に合わない靴を無理に履いていた状況や、靴に対する戸惑いも観察された。着装に対する風評や美意識については、手入れの行き届いていない靴、カカトがすりへっている靴が多いこと、きたない物を履いていると「行き届かない人」、底が擦り切れて曲がっている靴はいかにも無頓着でだらしない人、他の服飾品と不調和にならぬこと、靴も人中へ出る時と散歩する時とは区別することなど、経験のない靴の生活に人々の困惑具合が窺えた。同時に、洋装着用の調査データからは読み取れない婦人洋装の驚くべき増加の勢いと靴の普及との関連が推察された。

○染織・和装の分野では「銘仙」を調査対象とし、大正期から昭和30年頃の新聞（東京朝日新聞、大阪朝日新聞、都新聞、読売新聞、毎日新聞）、雑誌（風俗画報、三越、染織時報、婦女新聞、生活、淑女画報、婦人画報、婦人倶楽部、主婦之友、婦女界、婦人之友）、大正2年頃から昭和7年頃までの文学作品を採り上げた。

基本的には銘仙が普段着として捉えられ伝えられてきたことが窺えるが、その流行の推移が明確に観察される。大正期から昭和初期には毎月のように銘仙の記事が掲載

され集中している。その流行ぶりや流行り模様などが詳細に記述されているが、昭和10年頃になると次第に記述が減り、昭和20年から30年頃にはほとんど見られなくなる。昭和3年の婦人雑誌には、従来銘仙が平常着として格が低く外出には向かなかつたものであったこと、しかし柄に於いても織方においても非常に優れたものが製作され、「外出用としても少しも恥しくなく」、その需要範囲が極めて広くなり、一般の若い人及び中年向きにも「解織の様子が迎えられて来た」ことが著しい傾向となったと記され、銘仙の技術の進歩が銘仙を着る人々の幅を広げていったことを示している。また、銘仙を着ている人にタイピスト事務員や婦人記者などの職業婦人を挙げ、当時のモダン・ガール像からも捉えている。昭和初年頃には斬新な銘仙が競って求められ、華やかな銘仙が量産され、ミミ隠し、ショール、 parasolを取り合わせた流行の最先端を装っていたことが伺える。銘仙が新時代の織物として改良されたことは流行の証しであり、また要因でもあったと考察する。庶民の普段着にとどまらない、個性的な銘仙の着物は、後に「忘れられない懐かしい着物」として生活文化史上の存在意義が見出された。

○近代化の実相を知る切り口として、ファッションにおいても先端的存在として語られる「モダン・ガール」をキーワードに採り上げ、大正12年から昭和7年の新聞・雑誌記事、特に昭和2年の東京日日新聞、昭和3年から5年の川柳、同時期の婦人グラフ、奥むめお氏を主宰とした職業婦人社の『職業婦人』などの記述も加え、新しき女性像の論評と服飾表現について比較考察した。

当時、モダン・ガールの服飾面の特徴に断髪・洋装・洋風化粧という視覚を通じた典型的要素が各所に見られ、それがモダン・ガールの評価に連なっていたことを改めて確認した。しかし、装いの外観はひとつの表象化であって、内実の具体化を目指しての考察が重視されるべきである。

「モダン・ガール」は、服飾における文化現象と置き換えられるほどであり、従来の女性の服装の基準を遥かに超えた装いが社会における人間関係を刺激した。当時においてはその急変する服飾文化が魅力でもあり、また墮落を象徴するものでもあった、と考察した。その矛盾する側面を併せ持つ新しい装いの情報源は、近代化と共に進む消費社会への流れの中にあつたと読み取れる。西欧先進文化の情報化が促進し、中で

も婦人雑誌がその時々の流動する服飾文化を今日に伝えていることが観察された。

人々は文化が流動する現実を受け止めながら、当時の服飾の価値基準を超えた享受し難い装いが批判の対象となるモダン・ガール像と、装いが新型か否かに関わらず理想とされ、期待されるモダン・ガール像の両者の比較において論じていたと解された。

また、この語義についての試論として、髪を切る、最新の洋服を着る、厚化粧する、さらに、露出の多い服を着て振舞う身体的「動作」、自由で開放的な態度をも含めた「行為」、集団的に行なわれた風紀を乱す「行動」や、自らの意思による女権運動や仕事上の「活動」への連鎖的な表彰を内包した語であったと考察した。

○「色彩」を調査対象として、昭和元年から20年頃までの新聞・雑誌記事（読売新聞、東京毎日新聞、東京朝日新聞、山陽新報、婦人画報）から、和装、婦人服、紳士服、外套、ショール、帽子、ネクタイ、手袋、ハンドバッグ、水着等、洋装化が進む時代の流行色を中心に着目した。

そこには、色調・色彩効果・調和色という服飾における調和理論の展開が観察される。また百貨店（三越・白木屋・松坂屋・高島屋・松屋）の広告記事から、和装の色名には各店の独自性が見られるとともに、現在の伝統色名とは異なる判定しがたい色彩も散見され、時代の趣向を表現する色彩の様相が窺われた。着物の流行色の在り方は、主にアクセントカラーを強調していたことから、色彩表現の時代的特性を見ることができるといえる。

○以上のように、試行的に行った検索を基盤に、大正期から昭和初期の新聞や婦人雑誌に掲載された和・洋装、着装法、小物、髪型等に関する記述を中心に、検索項目を整理し、社会的背景を伴う婦人雑誌の広報的役割と生活文化変遷の様相の具体性を見出すことができた。

また服飾史研究に功績ある研究者の協力を得て、近代衣生活に関わる記録作成を行った結果、新たな視点から、より生活に密着した服飾関連用語を検索項目に加えることができた。改めて多項目からの本システムによる有機的・複合的な解析の試みが求められる。

今年度までにほぼ目標値のデータ集積は行えたが、具体的な解析には原典資料の詳細な調査と校正を要する。随時に取り組み成果発表を行ってゆきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1. 安蔵裕子、笹岡家が語る衣文化回顧録—笹岡洋一氏・照子氏聞き書き—、昭和女子大学学苑・近代文化研究所紀要、査読有、827号、2009年、117頁～142頁
2. 安蔵裕子・小泉真貴子、「モダンガール」にみる服飾文化、昭和女子大学学苑・近代文化研究所紀要、査読有、815号、2008年、98頁～115頁
3. 角田由美子、大正・昭和初期における靴の変遷、昭和女子大学学苑・近代文化研究所紀要、査読有、790号、2006年、82頁～104頁

〔学会発表〕（計1件）

1. 安蔵裕子、衣を巡る生活と文化—笹岡家の聞き書きから—、昭和女子大学日本文化史学会、2009年12月12日、昭和女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安蔵 裕子 (ANZO YUKO)
昭和女子大学・人間文化学部・教授
研究者番号：80102648

(2) 研究分担者

谷井 淑子 (TANII YOSHIKO)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：10095929
(H18→H20:連携研究者)

角田 由美子 (TSUNODA YUMIKO)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：30141287
(H18→H20:連携研究者)

(3) 連携研究者